

京都部落問題 研究資料センター通信

第31号

発行日 2013年4月25日（年4回発行） 編集・発行 京都部落問題研究資料センター

2013年度 部落史連続講座

第1回 6月7日（金） 京都の渡来系氏族・秦氏について
—開拓・外交・芸能系譜伝承—

講師：菅澤 庸子さん
（京都学園大学非常勤講師）

第2回 6月14日（金） 近世京都・山城の葬送と賤民・葬具業者

講師：木下 光生さん
（奈良大学文学部史学科准教授）

第3回 6月28日（金） ^{かざん}花山の清目をルーツにもつ近世の川田村
—村の三役揃い踏み—

講師：辻 ミチ子さん
（元京都文化短期大学教授）

* * * * *

時 間 午後6時30分～8時30分

場 所 京都府部落解放センター3階 第2会議室

参加費 無料～参加希望の方は前日までに電話・FAX・電子メールで連絡ください～

本の紹介

朝治武著『差別と反逆 平野小剣の生涯』

ひつたまやき

(大阪大学名誉教授)

1、はじめに

今年の暦によれば私は傘寿だという。これからは何の気兼ねもなく自由に物言いをしようという気分と、これからの発言は遺言となるという思いが交錯する。前者は社会的責任からの解放感であり、後者は最後の社会的責任を果たすべきだという義務感である。とはいえそれは私の気持ちだけのことであり、客観的には老害を及ぼすに過ぎないであろう。

本書の著者・朝治武氏は、沢山のことを教わってきた私の尊敬する友人であり、公明正大で正義感の強い人だから、その仕事はよるこんで褒め称えたいと思つて、書評の依頼に応じた。ところが本書を読むにしたがつて、自由に物言

者であり、のちに日本帝国主義の

旗振り役に「転向」した人物の評伝である。一見相矛盾する役割を演じた人物の評伝は難しい。難し

2、平野小剣の一生

本書の内容を要約しておこう。主人公平野小剣(一八九一—一九四〇)は、福島県の被差別部落に栃木家の五男として生れ重吉と名付けられた。彼は他の部落民と同じように幼少期から被差別部落民に対する様々な差別に悩みながら育ち、

父の死で高等小学校を中退、福島民報の「活版小僧」となった。一四歳の春、兄を頼つて上京、文選工として働くが、仲間と喧嘩した時「新平民」と罵られ、さらに女性からもその故を以て絶交状を送られ、その屈辱は絶望を生み、自暴自棄のすさんだ生活に陥つた。しかし二十四歳の春、「呪はれるものは呪ひ返せ」と遺言して、母は病死した。これを契機に部落差別と闘うことに目覚め、労働運動に入つていった。二十六歳の時(一九一七)平野徳三郎の娘ケンと結婚し平野家の婿養子になった。平野重吉である。のち離婚するが平野姓は変えなかった。小剣は号。

一九一七年、平野は立憲労働党の創立に参加し、翌年、活版印刷工組通信友会に加入する。そして京浜の印刷所を渡り歩きながら、組合活動で頭角を現し、信友会の代表として各種の会合や労働争議の支援・指導に参加し、彼の雄弁と情熱は多くの支持者を得て次第に有名になっていった。しかし労働運動の中でも部落民への差別は変わらず、部落民自身の手で解放を勝ち取るしかないと感じ、このころ各地に生れ始めた部落民の自主的な集団と連絡しあい、意見の違いを乗り越えて大同団結をはかっていく。全国水平社創立にさ

て水平社宣言の執筆にかかわった。その後も全国各地に水平運動の輪を広げる活動をすすめたが、その地盤は関東であった。左翼運動にアナ・ボル論争など運動方針や組織をめぐる対立が生まれて、それが水平運動にも持ち込まれ、関東でもアナ派とボル派の対立が生まれセクト化が進んだが、平野はこの両派には属さず第三派とでもいべきグループを作った。そのころから、全国的に水平運動に分裂・対立が深まったが、一九二四年末、平野は遠島スパイ問題を理由に全国水平社から除名された。

しかし彼は関東で水平活動を続けた。他方、朝鮮の被差別民・白丁の解放を目指す平野社の運動に関心を寄せ、二六年ソウルを訪れてその指導者たちと交流し、帰国して当時としては非常に優れた「朝鮮衡平運動の概観」を発表、日本の水平運動との連携を考えていたという。しかし翌年に保守的な「日本水平社」に加わり、国家主義へ傾斜していったという。二八年、中国山東省済南で日本軍が中国軍と衝突して済南城を占領し第二次山東出兵を呼び起こす事件が起ったが、この事件に触発されて平野は国家主義的な内外更始倶楽部を立ち上げた。彼はその後度々中国を訪れ、中国における排日教育の報告(『支那の排日教育』

一九三一年)をするなど、対支強硬の世論喚起に奔走する。

他方、著者は関東の水平運動に全国水平社の運動とは異質な運動が展開されたことを指摘する。運動が四分五裂し、全国水平社系の他に平野らの日本水平社系と態度不明の結社に三分された。日本水平社は平野の国家主義的な影響を受けながら、政治運動への展開をはかったが失敗し、次第に融和運動へ傾斜していく。平野はこの融和運動化に批判的で、水平社創立時の「水平意識」を發揮し「国難打開へ」向かうことが「ブラク大衆の受難と重荷を一掃」できると主張していた。三七年の盧溝橋事件で日中戦争は全面化し、国家主義諸団体は連合して対支同志会を結成し、侵略戦争の推進と欧米の不介入を唱えた。三九年、平野は中国視察に行くが、帰国後急性肺炎で倒れて四〇年一月に逝く。頭山満が葬儀委員長を務めたという。

3、水平運動の高揚と分裂

著者は水平運動の研究を進めていくなかで、これまでの通説に多くの疑問を抱き、次々にその問題を提起してきた(例えば朝治・黒川みどり・関口寛・藤野豊『「水平社伝説」からの解放』、かもがわ出版、二〇〇二年)が、なかでも「水平社宣

言」は西光万吉一人が書いたという伝説に対して、「西光が起草したものに平野が大幅な添削を行った」という西光の記憶(西光「水平社宣言」について)を重視し、平野小剣がこの宣言文に果たした役割を執念深く追跡して大きな成果を上げ、水平社運動の再検討をさせるほどの意味をもった。それがこの評伝を書く契機となったのである。

著者は、宣言文には、西光万吉の人間主義と平野の部落民意識「ともいふべき思想的核心が表現されていた」と指摘する。人間主義とは「人間の原理」を至高とする思想であり、普遍的な人間平等の原理で部落民を解放しようとする考えである。部落民意識とは「吾々がエタである事を誇り得る」意識であり、「エタ」「特殊部落」という呼称は賤称であるが、「反対に尊称たらしむる迄に」努力すべきだと議論されたように、民族性など特殊性に依拠して差別からの解放を期する考えである。

この部落民意識の問題には多様な内容が含まれていた。部落民をエタ民族と自称し民族的集団とみなす言論はこの時期相当広がっていたと思われる。それには江戸期から部落民を人種的に異なった存在とみなして蔑視する傾向があったこと、第一次大戦後の民族自決

論の高揚の影響、また一九一九年に日本政府がヴェルサイユ講和会議に提案した人種差別撤廃提案が呼び起こした日本国内の反応も注目される。そういうことから、大和民族に差別されているエタ民族という発想が生まれたわけである。水平社宣言のそうした表現について、戦後の研究者たちから天皇Ⅱ大和民族に対する批判意識を示すものだとする解釈が生まれたと思われる。戦後に日本単一民族説が支配的になっていったことの影響もある。しかしまた、戦前には日本帝国国民は多民族からなるという説は一般的だったのであり、多民族を統括支配する天皇という認識も支配的で、「エタ民族」の表現自体は天皇制批判には直結しない。しかしその意味合いがあったことも否定はできないだろう。

本書は、平野のロシア革命論を紹介しながら、「平野にとつて部落解放とは部落民衆の大和民族に対する反抗心と復讐心以外の何物でもなかった」と論じている(九五頁)。「祖先の歴史を見た時」「日本帝国はありがたいとは思はない」という平野の演説を紹介している。第三章「全国水平社創立への疾走」の最後は、「平野重吉ハ東京方面代表者ニシテ社会主義者ノ後援ニヨツテ運動セントスル唯一ノ主義者ナルラシク察セラル」という社

会主義を警戒する三好伊平次の言葉で閉じられている。水平運動の昂揚期に彼がほとんど社会主義者と同じ発想をしていたことは確かであろう。著者は他方、自由労働組合時代(一九二〇年一月)には角田清彦と「純正国家主義という思想的立場を共有し」ていたとする(六一頁)。このときの平野は「無政府社会主義を排斥」している。

二年で変化したのである。著者は「民族」とか「社会主義」といつてもこの時期の概念はあいまいで多様な意味で使われていたことわっており、民族と国民が同一視され、しばしば民族と階級が同一視されさえしていたのである。時期や状況によつても変化するから、現在使われている意味と同じに理解すると混乱が起きやすい。平野の思想がこの時ほどの思想であったか固定化することも危険である。彼自身あいまいで、また左右混合もしばしばで、著者もそう簡単に断定をしない。事実を尊重し矛盾を矛盾のままに出す手法がみられるが、それが読者に自由な解説(誤解)を許すことにもなっているのではない。矛盾した事実をどう著者が理解しているかを示す必要がある場合がある。この水平社創立期は、平野は多様な思想と格闘しながら、部落民の多様な運動をまとめて水平社を成功させようとした

と著者は言いたかったのであろう。というよりも、水平社創立に、関東地方の部落解放のために戦う人々や流れも大きくかわったというところ、何よりも関東も関西もそして全国各地で実に多様な運動が奔流していて、それらを平野が大団団結させようとしたことを著者が証明しようとしたのではないが、もちろん彼一人の力ではないが、平野の個人的な活動の事実を細かく拾い上げて叙述するのも、平野の活動分野・地域が広範なために、そのことがそのまま水平社における多様性を物語ることとなると考えてのことだろう。

現在のようにはグローバルイズムが深化した世界では、もつと違った形で差別克服が構想されなければならぬと私は考えるが、現在の尺度で過去を裁断してしまうことはできないだろう。他方、平野は水平社創立期には無限に社会主義へ接近していったが、この論争には興味を示さず嫌悪さえ示したようだが、平野の立つ位置からは両派の共生の条件を作りえたかもしれない。逆に内紛への嫌悪から国家主義に転じていったという推察も成り立つ。それら対立には、人間関係も強く作用し、諸個人の悩みや試行錯誤がぬいこまれていたはずであり、平野がどういう選択肢を前に、どのように悩んだのかは詳しく知りたいところである。

ともかく、水平社宣言はその後の運動の原点になったのであり、「人間主義」と「民族主義」の二つの考え方がそこに縫い込まれてきたとしても、それが分離して運動を動かしていたのではなく、二つの特徴が絡み合っていたのである。平野も水平社の原点に戻れという場合に「人間主義」を強調した。それがのちに対立・分裂をうみ出していくのである。

私にはその時の部落民衆の姿が見えてこない。それは私の不勉強によるのだろうが、これまでの部落史研究の文献などにもでてこないのではないか。それらを記録するのは困難なことだったのかもしれないし、その関心もなかったのかもしれない。そうであれば著者にもそのねだりをする事になるが、そうした関心から、日常的に平野は民衆にどのような物腰で、どのように語りかけていたのだろうか、私はとても知りたくなかったのである。平野と民衆との具体的な、人間的な関係のあり方である。

4、指導者の責任

本書に大きな違和感を抱いたのは、最後の第八章の題目が「最後まで貫いた国家主義」とされていることである。この題目のニュアンスは、最初から最後まで貫くという意味にとられやすい。そう思っ

がもたれて「遠島なる者と気脈を通じ久しく水平運動を食い物にした」ことを以て、二四年一二月に除名処分にした。関東水平社はこれを認めなかった。本書はこれを派閥抗争の結果だとしている。

平野がソウルへ行って衡平社幹部と交流し、朝鮮における白丁の状況を報告したのは二年後の二六年のことである。しかし、そのことで、平野の衡平社との交流を国際連帯として評価できるかどうかは、疑問が残る。二四年には、いくつかの水平団体が衡平社と交流していて、吉井浩存が平野の紹介状を持って訪ねているし、二五年には中西伊之助が衡平社の招待で「水・衡」の「共同戦線」を提唱、二六年の全国水平社大会には衡平社の金慶三が招かれるなど、平野と別にいくつかのグループが交流を進めていた。しかしそれらにはキムチョンミ『水平運動史研究』が指摘するように、差別に反対しながらも相手を蔑視する問題があったといえよう。平野の場合、国家主義運動に急速に傾いていった内、外更始倶楽部を立ち上げる時期、中国視察に何度も訪れて、その旅費は政府もちであったと本書も指摘するように、政府の中国侵略政策に前のめりに協力していったことを無視するわけにいかない。

著者は、序章での平野弁護で国

家主義にも良いのと悪いのとがあらうと言いつつ、政府から金をもらったから悪だというのは短絡しているという。政府からお金をもらうのは、正当な理由があれば問題にならない。問題はどのようなお金の貰い方をしたかなのである。国家主義については、広辞苑は「国家を人間社会の中で第一義的に考え、その権威と意思とに絶対の優位を認める立場」という。私はこの国家主義には良いも悪いもない、全否定の立場をとる。しかし、国家主義と国家主義者とは異なる。国家主義者でも国家の意思に反することがあり、谷干城の様な平和主義者もいる。彼は自分を国家主義者と思っているが、それにもかかわらず日清・日露の戦争に反対した。彼は国家よりも生命の価値を重視したのである。私は彼の平和主義を高く評価する。

もつとも国家主義による差別の再編強化の論理を受け入れる素地が水平運動の指導者の側にもあったかもしれないということは、転向の問題を含めて、あらためて問わなければならない問題であるように思われる。そこには権力の圧力に抗しきれない問題もあったが、自主的にそちらを選んで行った指導者たちも少なくないのであり、そういう問題の追及を本書が平野を通じて始めたと言ってもよいの

ではなかるうか。

5、おわりに

私も福澤論吉の評伝をまとめたことがあるが、彼の人生の軌跡には、平野とよく似たところがある。福澤も人間平等を掲げて人民を啓蒙して、巨大な影響を及ぼしたが、民衆の文明化は思うように進まなくて民衆蔑視に陥り、また民権運動の高揚に直面し、それに対抗しようとして弱肉強食の帝国主義を掲げるに至る。平野小剣もはじめ労働運動や水平運動にまい進した時は人間平等を説き差別を厳しく糾弾したが、全国水平社から排除されると、差別を国家の名で擁護・強化する国家主義運動へと転じていったのである。時代は異なり、福澤の掲げたスローガンが脱亜入欧だったのに対して平野は興亜脱欧と対照的であったが、ともに人間平等主義から帝国主義へと転向の軌跡を歩んだのである。帝国主義は今日では人間を差別的に支配するイデオロギーとして、世界で指弾されている。福沢や平野の活動した時期には国家のイデオロギーとして当然視されていた。しかし彼らが指導者として国家のためだと言って民衆を戦争に駆り立てた責任は重い。そして私たちも、植民地支配や侵略戦争の道を歩む罪を犯したのである。その意味では

二人は批判されるべきである。しかし、そのように罪を犯したからと言って二人の人生すべてが指弾されるべきではなかるう。

彼らの人間平等のための戦いは歴史的に高く評価されねばならないのである。著者が平野の否定的評価への異議申し立てとして本書を書いたということに、その意味で同意する。しかしまた、著者が平野に対する否定的評価の責任は「ボル派史観」にあり間違っているということには私は同意しがたい。「ボル派史観」というのは「戦後歴史学」をさしているように思われるが、私はそこで育ち、戦後歴史学の良質の部分を受け継ぎたいと思ってきた。そこには、一国史観・発展段階論・反映論等々と克服すべき言説が多いし、また自分自身の帝国意識の克服という課題もある。しかし、戦後歴史学の全否定(著者はそこまでいわないが)は、私にとって反戦平和の魂(古臭い?)の否定である。

いまや復古的な国家主義がグローバリズムと結合して臆面もなく、日本社会を支配しようとしている。人々の間に憎悪や蔑視を持ち込み、対立をあいり、差別を強化しようとするイデオロギーが私たちを試しているのではあるまいか。

(筑摩書房刊、二〇一三年一月、二八〇〇円)

本の紹介

山本栄子著

『歩 識字を求め、部落差別と闘いつづける』

湯浅孝子

(京都部落問題研究資料センター運営委員)

本書の表題を目にしたとき、「歩」は何と読むのか、意味は何かと目が釘付けになった。ページをくると中扉の裏に解説がついていた。

「『歩』の歩の将棋は負け将棋」ときく。たかが歩と侮るなけれど歩がなければどんな組織も成り立たない。歩が裏返れば金になる。組織の歩、一人ひとりを大切にしたい。

『歩』に送り仮名をあえてつけないことにした。『ふ』『あゆみ』『あゆむ』など、皆さんの好きなように読んで下さるとよいと思う。」

長い引用になったが、著者の強い思いが表れているので、かきうつした。それにしても洒落た題名ではある。

本書は著者が筆をとった部分ははじめに、第二、三章で、山本崇記氏のインタビューに答える形式

が第一章、対談は第四、六章まで（進行は前記の山本氏）で構成されている。対談形式は、一人で記すよりも、一つの事象を多角的にとらえられたり、より客観的に物事が見られることに気づかされた。

「親も学校でも教えてくれなかった部落問題を、解放運動は生きる喜びとして教えてくれた。私はこの機会に自分の持てるものすべてを書き残したく、おっちゃん（朝田善之助氏のこと―筆者注）が『運動で得たものは運動で返せ』と書いていたことがこれではないかと気づいた。」

著者は本書の刊行についてこのように記している。

著者の文章は歯ぎれよく、リズム感があり、ページをすばやく繰ることがができる。

はじめに第一章 部落解放運動と
の出会いから識字運動の担い手へ

ここに目を通せば、著者のこれまでの歩みと何を目指して生きてこられたのかが一目瞭然だ。京都の被差別部落に生まれ、育ち、解放運動に出会い、識字教室を立ち上げ、文字を獲得し、給食調理員として定年まで勤め、かたわら解放運動の中での要職を担ってきたこと、定年退職後、長年の夢であった中学、高校、大学への進学を果たしたこと、夫のことが紹介されている。

「敵は自分だ」

「今日という日は二度とこない」

「自分のことは自分で決めなければならぬ」

これらの思いをこめて著者は生きてきた。

部落内、外をこえ、すべての女性への励ましと応援の声にみちている。

著者は家庭の事情で、物心ついた時から祖父母のもとで暮らし、叔父、叔母を兄姉のように育て育った。幼少時代、つまり戦前の暮らしや小学校の生活、奉安殿や「ご真影」のことがエピソードとともに語られる。

小見出しを記すと、「生い立ちから―家庭環境の複雑さ」「差別に気づく」「心まで貧しくならな

いこと」「戦争と天皇制」「戦後」「青春時代」「結婚・出産」「子ども教育」「解放運動との出会い」「西三条の解放運動」「識字運動―母・妻であることとの関わり」「給食調理員として―現業職の現場」「日常のなかの部落問題」と一二の項目にわけて、八〇余年の生涯が語られる。

今となつては貴重な戦後間もない頃の西三条部落の建物や国民学校時代の子ども写真が掲載されている。

個人生活のうえで祖母、運動のうえでは朝田善之助氏へのあつい思いが伝わってくる。

第二章 おっちゃん（朝田善之助）の思い出

朝田善之助はあらためて紹介するまでもなく、戦前、戦後の部落解放運動史に名前が刻まれた人だ。本章では朝田善之助との出会い、彼から受けた指導のみならず、著者が運動にかかわる経緯やその後の活動が記される。従ってそれは一九七〇年代以降の京都府連の活動の紹介ともなる。「朝田学校」といわれていた学習会の様子も具体的に記され、筆者も深く納得させられた。

記される事柄は、朝田や著者のことだけでなく、彼につながる人の活動や行事と自由に拡がり、高知長浜の教科書無償闘争も紹介される。

「多くは言わないで、一人でいから変えてみる」「相手を納得させるだけの理論を持つ」の朝田の口ぐせは著者の胸深くに刻まれ、その後の著者の生き方に大きい影響を与えた。

被差別部落は厳しい目で見られている。運動を利用する人、部落差別を振り回す人がいれば、理解者を増やすどころか、解放運動が忌避されると朝田から教えられた。

朝田の教えを胸に刻んで「普段の生活態度が私達の運動である。私達を通して部落が見られていると思えば緊張する」という自己規律性を身につけていく。解放同盟員全員がこのような規律性をもっていれば、二〇〇六・七年にマスコミが報道した部落解放運動をめぐる不祥事事件はおこらなかったのではないか。

本章では個人的には、思わず頬がゆるんだり、目が釘づけにされた名前に出会った。

第三章 わたしにとっての識字運動

「子どもが小学校から持ち帰るプリントが読めない」と部落の一人の母親からの訴えを受けた著者は、地元の小学校の先生に相談をもちかけ、これを契機に壬生の識字教室は始まる。が、その場所がない。そこで彼女は週に一回夜の七〜九時まで自宅を開放する。その間夫は子どもを連れて自宅を出て行ってくれたという。

一年後には学習の場所は壬生隣保館に移っていった。ここではその内実が紹介される。本屋に本を探しに行ったこと、京都の歴史散策に出かけたこと、生徒同士で年賀状を交換しあったことなど。

著者が識字教室で作出した三点の作品と定年退職後に進学した西京商業高校での卒業式答辞、立命館大学二部へ進学する際の志望理由と自己推薦文が掲載されている。識字作品には解題が付され、内容の理解を助けている。

著者は文字を獲得することは「社会で生きていく権利だけでなく、人としての感性を獲得することだとも知りました」「学ぶことは私の心を強くしてくれた」と記す。「文字と言葉を獲得することは、部落問題を自分の血の通った言葉で考え表現する」ためという

著者の思いは、全編からにじみ出ている。

識字教室の活動については、次章第四章でも、小谷先生との対談で紹介される。

第四〜六章はいずれも進行役山本氏、彼の適宜な質問を受けて、二人の話が展開する運びになっている。話題の中心人物は、著者と対談する相手である。対談相手が、部落問題や部落出身者との出会いを通して、部落問題をどう理解し、そこに著者がどうかかわったかが話される。それぞれの章でくわしくみてみよう。

第四章 同和教育への違和感からその真髄へ

小谷先生は改良事業が西三条で開始された頃、地元の朱雀第四小学校に着任。当時西三条には部落解放同盟の支部活動はなかった。著者が自宅を開放し識字教室に取り組み始めた頃だった。

「恥ずかしいんですけど特殊学級がある」との校長の挨拶に、この校長の人権意識はどんなものだろうと反発を覚えたという。学校のなかを見ると同和地区の子どもだけが特別扱いの感じで違和感をもったとも。

ある時、著者の家での識字教室に行き合わせたとき、十人位のお母さんが自分の生い立ちを話す。「父は靴職人でした」「学校に行きたかったけど子守をさせられた」

母親たちの生い立ちを聞くにつけ、小谷先生はこれまでの自分が部落を外側からしか見ていなかったことに気づかされる。同和教育を強調すればするほど、部落外へも家庭訪問をするようになったという。教員にとって同和教育とは何か、部落の現実をみて、どのように変わっていったのかを率直にはなしておいでだ。「西三条の状況」の小見出しがについているように、当時の部落の現実が、小谷先生の目を通して語られる。また当時の部落の女性たちの内職であった鹿の子絞りの手仕事具体的に語られている。

小谷先生の目を通して当時の著者の行動や思いが語られる。

第五章 給食調理員と学校教員の出会い

本章では林先生やその夫、家族の者までが部落問題への理解を深めていく過程や、そこに著者がどう関わったのか、また林先生が目にした著者の仕事への熱意、個人

的な魅力が話される。

林先生は幼い頃、親から部落に対する差別的なことを教えられたという。西院小に赴任した当時は校区に改良事業の市営住宅が建ち、西院小は同和関係校になる。一七八七年月輪小学校へ教頭として赴任。そこで給食調理員として勤務していた著者と出会う。赴任して間もなく著者と個人的な話もするようになり、著者のこれまでの生き方や、暮らしを聞き、部落問題へ開眼させられたという。

林先生は京都の「旧家の嫁」として「姑と嫁」のあつれきを体験しながら教員の仕事を積みあげてきた。その厳しい生活を笑いとにも語る。PTAのジェンダーの学習会で「性差別」に開眼し、自分のこれまでの生活が理解できたという。

女性問題の話題は「丙午」のこゝと、男女雇用機会均等法の学校現場での適用のことなどが語られる。著者が生れ育った西三条を出て、結婚後の八幡の暮らしが具体的に語られる。西三条では耳にしたことのない音が体に入ってくる。その音は自分のこれまでの環境とは全く異なる地域であると体ごと自覚させられた。人間の育つ環境

の大切さを痛感させられたともいう。

本章のしめくくりの著者の言葉は重い。識字教室にもかかわる言葉。「今は誰も教育は閉ざされていない。自分らがそこへ行かなあかん。私らこれから知らんねん、書けへんねん、と言つてられない。」

第六章 識字学級から夜間中学へ

対談者は郁文中三年生の時国語を習った諏訪先生。先生は女の子ばかり五人の五番目の女の子として出生。両親はがっかりするやら恥ずかしいやらと、そんな話を聞かされて大きくなったという。郁文中で在日の人や部落の人とかかわって、この人たちと自分は似ていると思つたと。自分のせいではなくて理不尽な扱いや偏見の目にさらされ、人ごととは思えなかつたと。

先生は女が大学へ行つてもろくなことはないという親の考えで、大学進学はできなかつた。四〇歳代になり息子の大学生活をみるにつけ、羨やましさが増し、大学入学を果たす。大学の講義で識字学級のことを知り、自分も識字運動にかかわりたい思いで教員免許を取得した。

郁文中学校（二部）は義務教育未修了者対象学校として誕生した。生徒は在日の人が多かつたという。

「彼女は授業中まつすぐこつちを見つめて目をそらさない」生徒だつたと、諏訪先生。また「言葉に対する関心、欲求の強い」人との印象をもつておいでだ。

本章では中学校のことだけでなく、西京商業高校、立命館大学二部への進学、そこでの学校生活が話し合われる。章立の字面にとらわれていると、話の展開に意外な思いにとらわれる。先生は著者の高校、大学の入学式や高校の運動会や卒業式と、節目の行事に参加し、当時の著者の姿を目に焼き付けている。

諏訪先生は対談の終わりの方で、部落のこれからのあり方を、率直に質問する。「かたまつて暮らすのか、混ざるのがよいのか」著者は「交流だ」と答える。著者が以前、八幡に住んだ経験が大きいのだろう。著者は外から部落を見る大切さをあつく語っている。

終わりに

ひるがえつて本書のような内容の著書は、この間しばらく刊行されなかつた。ひさしぶりの出版と

いえよう。

これまでも部落解放運動に参加する女性たちの手記や聞き取りが公刊されてきた。解放同盟中央本部が編集したものは『差別のなかを生きぬいて私が歩んできた道』『涙を怒りにかえて 私の歩んできた道』『女たちの荊冠旗 私の歩んできた道』などがある。各都道府県レベルのものや研究者のまとめた物など枚挙にいとまがない。紹介するにはページ数が不足するので、黒川みどり編著『部落史研究からの発信』第二巻（部落解放・人権研究所）の「部落女性と解放運動」の章を参照していただきたい。これらの作品の中に本書もつけ加えられ、部落の女性の生き方を学ぶ貴重な資料を提供したといえよう。

各地域で、各年代の女性の手になる本書のようなものが刊行されると、より豊かな部落像や部落差別の実態が社会に提供されることになるだろう。

最後のページに、著者の略歴が年表にして紹介され、本書の理解の助けとなっている。

（二〇一二年二月、解放出版社発売、一五〇〇円）

講演録 奈良から福島原発事故を考える—放射能汚染にどう向き合うのか— 長谷川健一

奈良人権・部落解放研究所研究紀要総目次

ヒューマンJournal 203号 (自由同和会中央本部刊, 2012.12) : 500円

週刊朝日の緊急連載「ハシタ奴の本性」の記事に対する抗議文

部落解放運動40年を振り返って 6 既存の解放理論を見直す 灘本昌久

ヒューマンライツ 298 (部落解放・人権研究所刊, 2013.1) : 525円

歌い、語る盲目の女性旅芸人「高田瞽女(ごぜ)」(新潟) 小山紳人

貧困・社会的排除に取り組むパーソナル・サポート・モデル事業—大阪での事例から 福原宏幸

『AERA』よ、お前もか—批判的精神を失った結婚相談所記事 野口道彦

ヒューマンライツ 299 (部落解放・人権研究所刊, 2013.2) : 525円

生活実態調査にみる部落女性の実態 内田龍史

書評 神原文子編著『ひとり親家庭を支援するために—その現実から支援策を学ぶ—』 杉井潤子

ひょうご部落解放 147 (ひょうご部落解放・人権研究所刊, 2012.12) : 700円

部落解放研究第33回兵庫県集會報告書

特別報告 兵庫県内自治体の市民意識調査結果から 阿久澤麻理子

佛教大学歴史学部論集 3 (佛教大学歴史学部刊, 2013.3)

逢坂山と関清水蟬丸宮—さら説経と蟬丸信仰を中心に— 齊藤利彦

部落解放 672 (解放出版社刊, 2013.1) : 1,050円
第43回部落解放・人権夏期講座報告書

部落解放 673 (解放出版社刊, 2013.2) : 630円

特集 解放運動の現場から 東海編

劣悪な環境をなんとか改善したい 岐阜県の部落解放運動の歴史と現状 古田健二/解放の灯をともしつづける

静岡県の部落解放運動の歴史と現状 小松原正孝, 吉岡良治/一人ひとりの想いを大切に 愛知県の部落解放運動の歴史と現状 山崎鈴子/若い活動家が育ちはじめた

三重県の部落解放運動の歴史と現状 松岡克己

関東の部落を訪ねて 大阪社会部記者の目で見つ 戸田栄本の紹介

『ヒーローを待っていても世界は変わらない』(湯浅誠著) / 『戦後沖縄の人権史 沖縄人権協会半世紀の歩み』(沖縄人権協会編著) / 『戦後史の正体 1945—2012』(孫崎享著) / 『餓鬼者 がきもん 共に学び、共に生きる子どもたち』(松森俊尚著) / 『驚きの介護民俗学』(六車由実著) / 『フクシマ物語 幸四郎の村』(八木澤高明著)

アメリカ大統領選挙のオバマの勝利 白人とマイノリティの二極化か? 多様な社会への前進か? 柏木宏

全国母子世帯等調査から考えるシングルマザーの生活 大森順子

アメリカ大統領選挙のオバマの勝利 白人とマイノリティの二極化か? 多様な社会への前進か? 柏木宏

全国母子世帯等調査から考えるシングルマザーの生活 大森順子

水平社論争の群像 3 徹底的糾弾 朝治武

部落解放 674 (解放出版社刊, 2013.2) : 1,050円

部落解放研究第46回全国集會報告書

部落解放 675 (解放出版社刊, 2013.3) : 630円

特集 企業と人権啓発

東京音楽通信 宇崎竜童と竹田の子守歌 1 日本のブルース、子守歌 藤田正

本の紹介 部落共同体の「崩壊と離散」の年代記 『田村孟全小説集』 高澤秀次

続・福島差別 取り組みへの三つの論点 奥田均

武内了温先生のこと 泉恵機

水平社論争の群像 4 国際連帯 朝治武

部落解放研究 197 (部落解放・人権研究所刊, 2013.3) : 1,400円

特集 近世被差別民と宗教

非人にとっての救いと宗教 水本正人/「癩人小屋」の勧進と地域社会 宮前千雅子/被差別部落寺院をめぐる社会的関係の様相 奥本武裕/浄土真宗の「尼講」について 紀伊国の事例から 矢野治世美

自主的融和団体・高知県自治団の軌跡 吉田文茂

書評

藤本清二郎『近世身分社会の仲間構造』 吉田勉/朝治武・守安敏司編『水平社宣言の熱と光』 吉田文茂/乾武俊『能面以前 その基層への往還』 仮面・芸能・被差別民の詩学 友常勉

部落解放研究 19 (広島部落解放研究所刊, 2013.1) : 1,000円

オスプレイ配備にみる軍事植民地状態の沖縄—ヤマトの沖縄迫害の構造 石原昌家

被差別部落の生活・階層・文化

福山市同和地区実態調査からみえるもの 小山友康/被差別部落の貧困のサイクルと下層問題 青木秀男/「被差別部落の文化」言説の批判的研究—いわゆる門付けの音楽社会学的分析 小早川明良

貧困と差別

生活保護受給者はなぜ増えたのか—新たな階級の形成と拡大 大倉祐二/栃木県における外国人生徒の高校進学状況 田巻松雄/都市先住民のネットワーク—フィリピン・マニラの事例から 吉田舞

部落問題研究 203 (部落問題研究所刊, 2013.1) : 1,111円

居留地付き遊廓の社会構造—東京築地・新嶋原遊廓を素材に— 佐賀朝

首都東京における警視庁の地域支配—日露戦後期を中心に— 大日方純夫

書評 岡田知弘著『震災からの地域再生—一人間の復興か 惨事便乗型「構造改革」か』 功刀俊洋

「竹田の子守歌」の文脈—京都のうたごえ運動の一環として— 武島良成

和歌山研究所通信 42 (和歌山人権研究所刊, 2013.1)

高野山大学における人権問題への取り組み 南昌宏

ライブラリー・リソース・ガイド 2 (アカデミック・リソース・ガイド刊, 2013.2) : 2,500円

「知」の機会不平等を解消するために—何から始めればよいのか— みわよしこ

図書館システムの現在 嶋田綾子

和歌山研究所通信 42 (和歌山人権研究所刊, 2013.1)

高野山大学における人権問題への取り組み 南昌宏

ライブラリー・リソース・ガイド 2 (アカデミック・リソース・ガイド刊, 2013.2) : 2,500円

「知」の機会不平等を解消するために—何から始めればよいのか— みわよしこ

図書館システムの現在 嶋田綾子

- 18 「資格・立場の絶対化」はどれだけゆらいだかー
“『こべる』がなくなった日々”に備えて 平川茂/19
『こべる』から発せられたメッセージは何か 高田嘉敬
/20 部落問題の情報・論争の場としての『こべる』 稲
野明英
四日市から 28 人間をより深く見つめるようになった
坂倉加代子
＜幻の銀河＞一写真と文 小林茂
濃水飛山記 藤田敬一
- コリアンコミュニティ研究 3** (こりあんコミュニティ
研究会刊, 2012. 12) : 1,600円
特集1 東日本大震災と定住外国人支援の課題
『伝える・支える・立ち上がる』 大村昌枝/阪神・淡
路大震災から東日本大震災へ 吉富志津代/「災害弱者」
の人権を考える 藤本伸樹
特集2 西成エスニックミュージアムを展望する
西成の在日コリアンと産業 川本綾/大阪市西成地区に
おける沖縄出身者の定着過程と県人会活動 中西雄二/
西成の在日コリアンにおける信仰と教育 川本綾/民族
学級の歴史と課題 岩山春夫
地域コミュニティの観点からみた外国籍住民をめぐる防
災の課題 福本拓
戦後、消滅した在日朝鮮人の集住地区 本岡拓哉
京都の伝統産業、西陣織に従事した朝鮮人労働者 1 高
野昭雄
書評
駒井洋監修、鈴木江理子編著『移民・ディアスポラ研究
2 東日本大震災と外国人移住者たち』 二階堂裕子/杵
三石著『知っていますか、朝鮮学校』 柴田剛
- 狭山差別裁判 435号** (部落解放同盟中央本部中央狭山
闘争本部刊, 2012. 6) : 300円
野間宏と寺尾判決 12 庭山英雄
- 狭山差別裁判 436号** (部落解放同盟中央本部中央狭山
闘争本部刊, 2012. 7) : 300円
野間宏と寺尾判決 13 庭山英雄
- 試行社通信 315** (八木晃介刊, 2013. 1)
部落問題への発言再開
- 社会科学 97号** (同志社大学人文科学研究所刊, 2013. 2) :
1,000円
特集 梶村秀樹の歴史学を読みなおす
- 人権21 調査と研究 222** (おかやま人権研究センター
刊, 2013. 2) : 650円
特集 障がいと人権
- 人権と部落問題 839** (部落問題研究所刊, 2013. 2) :
630円
特集 沖縄から一平和と人権を問う
文芸の散歩道 近世文芸に著された賤民一乞食の情と義
小原亨
- 人権と部落問題 840** (部落問題研究所刊, 2013. 2) :
1,155円
特集 同和行政の終結と住民自治
- 人権と部落問題 841** (部落問題研究所刊, 2013. 3) :
630円
特集 「3・11」が問いかけること
高校日本史教科書はどうか変わったか 小牧薫
文芸の散歩道 ある小作農民の抵抗—谷口善太郎作「土
地はだれのものか」を読む 水川隆夫
- じんけんぶんかまちづくり 38** (とよなか人権文化ま
ちづくり協会刊, 2013. 3)
書評・この1冊 服部英雄著『河原ノ者・非人・秀吉』
玉置好徳
- 人権問題 370** (兵庫人権問題研究所刊, 2013. 1) : 700
円
八鹿高校事件の真実を改めて世に問う
7 生徒達が見た“八鹿高校事件”上/8 “八鹿高校事件”
前夜～「解放研」教師・「解放教育」との闘い～
- 振興会通信 108** (同和教育振興会刊, 2013. 1)
同朋運動史の窓 左右田昌幸
「安芸教区 過去帳又はこれに類する帳簿の開示問題」
について 小笠原正仁
- 水平社博物館研究紀要 15号** (水平社博物館刊, 2013.
3) : 1,000円
北原直訴事件—決行場面を中心に— 今岡順二
続・高知県水平社の政治運動への進出 吉田文茂
鴨神に関する一考察 記紀神話ならびに『風土記』等
に出る鴨神とは何か 辻本正教
- 地域と人権 1120号** (全国地域人権運動総連合刊, 201
3. 1. 15) : 150円
『週刊朝日の橋下徹・大阪市長についての連載記事に
関する朝日新聞社報道と人権委員会の見解』に対する意見
書 神戸人権交流協議会—(2012年11月30日申し入れ)
- 地域と人権 1122号** (全国地域人権運動総連合刊, 201
3. 3. 15) : 150円
国民的融合論との対話 部落問題解決への理論的軌跡と
展開 24 学者の貢献 1 丹波正史
- 地域と人権京都 640号** (京都地域人権運動連合会刊,
2013. 3) : 150円
同和奨学金返還問題の検討 5 川部昇
- 月刊地域と人権 347** (全国地域人権運動総連合刊, 20
13. 2) : 350円
特集 全国人権連第5回定期大会
- であい 610** (全国人権教育研究協議会刊, 2013. 1) : 1
50円
人権文化を拓く 183 言語マイノリティと言語権 柏木宏
- であい 611** (全国人権教育研究協議会刊, 2013. 2) : 1
50円
人権文化を拓く 183 多民族社会での姓を考える—オ
ーストラリアから 岡野かおり
- 奈良人権・部落解放研究所紀要 30号** (奈良人権・部
落解放研究所刊, 2012. 3) : 1,500円
雨乞いいづとめ考—被差別民衆史の視点から「教祖伝」
を読む— 池田士郎
史料紹介 鎌田男子青年団決議録 井岡康時
東日本大震災の復興過程にみる人権のまちづくりに関す
る一考察 寺川政司
インターネットと人権—ユビキタス社会の闇— 中野博
章

ハミルトン著)

滋賀県水平社の闘い 忘れられていた水平社
フィールドワーク「鈴木孫一と雑賀一揆、そして今」
ぶらくを読む 77 被差別部落はなぜ日本近現代社会に残ったのか 坂野潤治の近著を読む 湧水野亮輔

解放新聞大阪版 1943号 (解放新聞社大阪支局刊, 2013.2.5) : 100円

大阪市立桜宮高校の生徒の人権を守り、人権教育の確立を求める決議 部落解放同盟大阪府連合会第3回府連委員会

解放新聞大阪版 1945号 (解放新聞社大阪支局刊, 2013.2.25) : 100円

文藝春秋社から検証と見解 桜宮高校めぐりの問題で

解放新聞京都版 946号 (解放新聞社京都支局刊, 2013.3.1) : 70円

書評 山本栄子著『歩』 秋定嘉和

解放新聞京都市版 257号 (部落解放同盟京都市協議会刊, 2013.3) : 150円

京都市いきいき市民活動センター探訪 上鳥羽南部いきいき市民活動センターを訪ねて

解放新聞東京版 803・804号 (解放新聞社東京支局刊, 2013.1・15) : 180円

八王子の被差別部落とキリスト教、自由民権運動、そして皮革産業 1 八王子の被差別部落とキリスト教 山上卓樹さんと山上カクさんを中心に 石居人也, 小島正次, 水野松男

江戸時代の皮革文化—台東区皮革産業資料館で見る— 水野松男

解放新聞東京版 807号 (解放新聞社東京支局刊, 2013.3.1) : 90円

八王子の被差別部落とキリスト教、自由民権運動、そして皮革産業 2 八王子の被差別部落と運動、生業 山上卓樹さんを中心に 石居人也, 小島正次, 水野松男

解放新聞東京版 808号 (解放新聞社東京支局刊, 2013.3.15) : 90円

東京の部落差別事件と古地図問題 大江戸今昔マップ差別助長事件と「古地図問題」 近藤登志一

解放新聞栃木版 395号 (解放新聞社栃木支局刊, 2013.1) : 80円

日光神領と被差別民

解放新聞奈良県版 974号 (解放新聞社奈良支局刊, 2013.2.25) : 50円

2013年度一般運動方針(案)特集号

架橋 28 (鳥取市人権情報センター刊, 2013.2)

特集1 個人識別情報について考える

特集2 新型出生前診断を考える—いのちの選別につながらないために—

語る・かたる・トーク 215 (横浜国際人権センター刊, 2013.1) : 500円

つれづれの人権日誌 78 “冬来たりなば春遠からじ” 2 —部落解放に資する教育とは何だろうか— 林力

シリーズ「解放教育」継承への扉 12 本当の思いを掲載できなかった「学級通信」 外川正明

語る・かたる・トーク 216 (横浜国際人権センター刊, 2013.2) : 500円

つれづれの人権日誌 79 “冬来たりなば春遠からじ” 3

部落解放に資する教育とは何だろうか 林力

シリーズ「解放教育」継承への扉 13 寄り添うとは何なのか…チエさんとの再会から 外川正明

カトリック大阪教会管区部落差別人権活動センターたより 31 (カトリック大阪教会管区部落差別人権活動センター刊, 2013.1)

第5回対話集会 『忌避意識』それなんやねん 山村暁子さん

「第5回対話集会」に参加して 篠原誠

紀州経済史文化史研究所紀要 33号 (和歌山大学紀州経済史文化史研究所刊, 2012.12)

近世身分社会の牢と牢番役 藤本清二郎

京都市政史編さん通信 44 (京都市市政史編さん委員会刊, 2012.12)

京都市都市計画事業の1921年前半(下) —河原町通拡築か木屋町通か 伊藤之雄

京都女子大学宗教・文化研究所研究紀要 25号 (京都女子大学宗教・文化研究所刊, 2012.3)

戦前期京都市における都市下層の職業構成 2 高野昭雄

京都女子大学宗教・文化研究所研究紀要 26号 (京都女子大学宗教・文化研究所刊, 2013.3)

戦前期京都市における都市下層の職業構成 3 高野昭雄

京都精華大学紀要 42号 (京都精華大学刊, 2013.3)

近世岩倉の茶釜師村 中西宏次

京都部落問題研究資料センター通信 30号 (京都部落問題研究資料センター編刊/2013.1)

報告 2012年度部落史連続講座～全国水平社をめぐって～

本の紹介 八箇亮仁著『病む社会・国家と被差別部落』

田中和男

在野の融和運動家・植村省馬 3 吉田文茂

収集逐次刊行物目次(2012年10月～12月受入)

キリスト教社会問題研究 61 (同志社大学人文科学研究刊, 2013.1)

杉井六郎名誉教授追悼記念号

グローブ 72 (世界人権問題研究センター刊, 2013.1)

ロマの差別と闘うヨーロッパ 中井伊都子

吉田文治と『特殊部落一千年史』—水平運動を支えた出版人— 白石正明

“おふだ”と町内会 水野直樹

神戸女学院大学の女性学 米田眞澄

「調査なくして発言なし」人権意識調査結果は活かされてこそ 外川正明

「京都ヒューマンフェスタ2012」参加企画 「全国水平社の人々—創立90周年によせて—」開催報告 本郷浩二

人権の“館” ヒューマン・アルカディア 仲尾宏

こべる 239 (こべる刊行会刊, 2013.2) : 300円

『こべる』終刊に寄せて

「ひろば」の消失を惜しむ 野町均/『同和はこわい考』

の差別論 柚岡正禎/これからをどう生きるのか 栗田尋美/「ADHDという憂鬱」その後II—旅立ち 中西仁

/私にとっての『こべる』 次田哲治

<幻の銀河>—写真と文 小林茂

濃水飛山記 藤田敬一

こべる 240 (こべる刊行会刊, 2013.3) : 300円

『こべる』終刊に寄せて

収集逐次刊行物目次 (2013年1月～3月受入)

～各逐次刊行物の目次の中から部落問題関係のものを中心にピックアップしました～

朝田教育財団だより 18 (朝田教育財団刊, 2013.1)
公器としてのマスコミに部落差別について認識の深化を願う 松井珍男子

明日を拓く 96 解放研究 26 (東日本部落解放研究所刊, 2012.11) : 2,100円

関東水平運動と平野小剣—全国水平社九〇周年に寄せて— 朝治武

「助左衛門文書」と相州大磯宿の被差別民 鳥山洋

神事舞太夫の身分と職分 橋本鶴人

地租改正期、部落における土地を守る闘い—多摩の二件の事例から— 小島正次

武州石坂村長吏の動向と「御一新」期一秣場開発計画・集議院への建白等をめぐって 大熊哲雄

史料紹介 『昭和十年度 山梨県ノ融和事業概況』 友寄景方

明日を拓く 97・98 (東日本部落解放研究所刊, 2012.12) : 2,100円

特集1 第三回東日本同和教育実践交流会

特集2 二つの世代が語る墨田の同和教育との出会いと実践—木下川小学校の統廃合から10年目を迎えて—

部落史の断章 『和田村の長蔵』とは… 松本勝

本の紹介

今井照容『三角寛「サンカ小説」の誕生』 瀬尾健/友常勉『戦後部落解放運動史—永続革命の行方』 廣岡浄進

IMADR-JC通信 172 (反差別国際運動日本委員会刊, 2012.12) : 750円

特集 日本におけるヘイトスピーチ

ウィングスきょうと 114 (京都市男女共同参画推進協会刊, 2013.2)

図書情報室新刊案内

『女ことばと日本語』 (中村桃子著) / 『この年齢だった』 (酒井順子著)

小樽商科大学商学討究 第63巻第2・3合併号 (小樽商科大学刊, 2012.12)

荒神橋事件の時代—板東慧氏に聞く— 今西一

かわとはきもの 162 (東京都立皮革技術センター台東支所刊, 2012.12)

靴の歴史散歩 107 稲川實

皮革関連統計資料

解放新聞 2603号 (解放新聞社刊, 2013.1.21) : 80円

解放の文学 81 莫言『豊乳肥臀』 音谷健郎

今週の1冊 袴田巖さんを救う会編『主よ、いつまでですか 無実の死刑囚・袴田巖獄中書簡』

内閣府の「人権擁護に関する世論調査」報告書から

解放新聞 2604号 (解放新聞社刊, 2013.1.28) : 80円

ぶらくを読む 76 近代都市大阪の西浜・スラム・盛り場 湧水野亮輔

解放新聞 2605号 (解放新聞社刊, 2013.2.4) : 120円
2013年度一般運動方針 (第1次草案)

解放新聞 2606号 (解放新聞社刊, 2013.2.11) : 80円

主張 『週刊朝日』差別記事事件を糾弾し、差別撤廃、人権確立への表現・報道の創造を

山口公博が読む今月の本

『中国は、いま』 (国分良成編) / 『昭和戦前期の政党政治—二大政党制はなぜ挫折したのか』 (筒井清忠著)

／『ニセ札つかいの手記』 (武田泰淳著)

『週刊朝日』差別記事事件で話し合い

解放新聞 2608号 (解放新聞社刊, 2013.2.25) : 80円

『週刊朝日』が話し合いうけ文書

解放の文学 82 歌集『震災三十一文字』 音谷健郎

解放新聞 2609号 (解放新聞社刊, 2013.3.4) : 80円

山口公博が読む今月の本

『JAMJAM日記』 (殿山泰司著) / 『絵巻物に見る日本庶民生活誌』 (宮本常一著) / 『解錠師』 (ステイーヴ・

事務局よりお知らせ

◇本年度も部落史連続講座を開催します。6月は前近代、11月から12月にかけては近現代を予定しています。是非ふるってご参加ください。

◇『2012年度部落史連続講座講演録』ができました。郵送をご希望の方は、メール・電話にてご連絡ください。尚、ホームページで2006年度からの講演録を全てを読むことができますので、こちらもご利用ください。

◇センター通信でご紹介している書籍は、資料室に配架していますので自由に閲覧していただけます。また、今号で湯浅さんが紹介して下さった山本栄子さんの『歩 識字を求め、部落差別と闘いつづける』は販売もしています。ご希望の方はご連絡ください。

□所在地 〒603-8151 京都市北区小山下総町5-1 京都府部落解放センター3階

□TEL/FAX 075-415-1032

□URL <http://suishinkyokai.jp/shiryo/index.html>

□開室日時 月曜日～金曜日 第2・4土曜日 11時～17時 (祝日・木曜(月2回)・年末年始は休みます)

□交通機関 市営地下鉄烏丸線「鞍馬口」駅(京都駅より約10分)下車 北へ徒歩5分